

# 領域「健康」および「保育内容の指導法（健康）」に関する 授業内容の検討

—運動遊びを用いた模擬保育を通して—

井 崎 美 代

## Examination of teaching content on “Health” and childcare content “Health” —Through simulated childcare with physical activity play—

IZAKI Miyo

### 1 問題と目的

文部科学省は、学習指導要領の改正及び2018年4月1日からの施行に関し、2017年3月31日に告示(文部科学省告示第六十二)<sup>1</sup>を公示した。周知徹底の期間を経た2018年4月からは新しい幼稚園教育要領が全面実施され、現在に至っている。

改定のポイント<sup>2</sup>として、幼稚園教育の基本は、これまで同様「環境を通して行う教育」であり、幼稚園教育において育みたい資質・能力が3つの柱(「知識や技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」)として整理、明確化された。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、5歳児終了時までには育ってほしい具体的な10の姿(「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心」「感覚、言葉による伝えあい」「豊かな感性と表現」)が示された。幼稚園等と小学校教諭が持つ5歳児修了時の姿が共有化されることにより、幼児教育と小学校教育との接続の一層の強化を推進する重要性が示されたものになる。

また、教員養成に関する法令改正に伴い、改正前の教職課程「教科に関する科目」(幼稚園教諭一種免許状6単位、幼稚園教諭二種免許状4単位：以下、「一種」「二種」という。)と、教職に関する科目のうち「教育課程及び指導法に関する科目」(一種18単位、二種12単位)は「領域及び保育内容の指導法に

関する科目」(一種16単位、二種12単位)に変更され、「領域に関する専門的事項」及び「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」から構成される新しい教育課程が始められた。このことは、「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」に関する科目の位置づけの変更と「教科に関する科目」が「領域に関する専門的事項」に関する科目として新設することを求められることを意味する。この「領域に関する専門的事項」は、領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを意味し、「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」は、領域のねらいや内容を踏まえた上で、領域毎の保育内容の指導法で実践すべき力を身に付けることを目的に設定されている。

「領域に関する専門的事項の考え方」<sup>3</sup>として、幼稚園教育において、「何をどのように指導するのか」という視点で見たときの『「何を」にあたる部分』が「領域」であり、領域論をもとに指導法が展開されることになる。そのため、授業担当者に求められることとして、①「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」の各領域の担当者と連携をとる必要がある、②「領域に関する専門的事項」に関する科目と「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」に関する科目のどちらを先に教えるかによって、扱う内容が変わってくるのが想定される、と示されている。

加えて、「モデルカリキュラム」では、「領域に関する専門的事項」を各領域に1単位ずつ、「保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」を2

単位ずつとして示されているが、複合的な科目の想定や「必ずしも領域論と指導法との単位が決まっているわけではない。」とし、各養成校で工夫することが可能となっている。

文部科学省によると、「平成31年4月1日から、認定を受けた1,283校（大学 606校・大学院 413校・短期大学 228校・大学専攻科 19校・短期大学専攻科 17校）の大学等の合計 1 万9,416課程で履修内容を充実させた教職課程」<sup>4</sup>が開始され、「領域に関する専門的事項の履修」における経過措置としては、「平成31年4月1日より前に幼稚園教諭の課程として認定された課程については、平成34年度までに入学し引き続き在学する学生に対して、小学校の教科に関する専門的事項の単位を修得させることにより、領域に関する専門的事項の単位を修得させたものとみなすことができること。（附則第7項）」<sup>5</sup>としている。

そこで、本稿においては、保育者養成校である本学における新教職課程のスタートにあたり、旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行に際しての筆者の担当する科目間の系統性を意識した授業内容を検討することを目的とする。具体的には旧カリキュラムにおける「教科に関する科目」としての「体育」（2単位）、「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」としての「保育内容（健康）」（2単位）を対象とし、その検討過程と結果について考察する。

## 2 新カリキュラム移行への課題の検討

### 1) 単位数について

図1は、「教科に関する科目」の変更に伴う、旧カリキュラムと新カリキュラムにおける該当科目名と単位数の対応表である。

(旧カリキュラム)		(新カリキュラム)
「保育内容(健康)」 2単位(15コマ)	➡	「保育内容(健康)」 2単位(15コマ)
「体育」 2単位(15コマ)		「こどもと健康」 1単位(8コマ)

図1 変更に伴う対応表

「保育内容（健康）」については単位数の変更はないが、「教科に関する科目」としての「体育」を「領

域に関する専門的事項」に関する科目としての「子どもと健康」に変更するにあたり、2単位から1単位（授業回数は15回から8回に変更）と単位数及び時間数ともに減少する変更となった。

### 2) 授業内容について

#### (1) 「運動遊び」について

##### ① 学生の現状

経験年数の少ない保育者や保育者志望の学生に対し、「遊びの経験が少ない」、「遊びを知らない」、「遊びのレパートリーが少ない」などの指摘があるが、本学の授業を進めていく際にも、その指摘を改めて実感することは多い。

本学の「教科に関する科目」としての「体育」において「運動遊び」を中心に授業を展開していくなかで、例えば、事前学習の課題として「〇〇を使った運動遊びにはどのようなものがあるか」を課し、次の授業でそれぞれが書きだしたA3の紙を掲示すると、同じような遊びが並ぶ傾向にある。また、「運動遊び」を展開していくなかで、改めて「他にはどのような遊び方ができるか」、「他にどのような遊びを知っているか」などを確認しながら進めていく際にも、経験したことがあると思われる遊びや事前に調べた遊びであっても、授業後の学生の振り返りからは、「分かっているつもりだったが、説明しようとすると説明できない」、「調べてはきたものの、（経験していないために）イメージしにくい」などの現状が明らかになった。このような学生の現状からは「指導法」の学びに加え、運動遊びの経験やレパートリーの少なさを解消するための運動遊びを経験する時間の確保が課題であると考えられた。

##### ② 「運動遊び」の時間数

演習科目として実施してきた「教科に関する科目」としての「体育」（2単位）においては、「運動遊び」を中心に展開していた。変更後に講義科目として実施する予定の「領域に関する専門的事項」に関する科目としての「こどもと健康」（1単位）においては、前述したように単位数（時間数）が2単位から1単位（授業回数は15回から8回に変更）となることに加え、演習科目から講義科目に変更されるために、「運動遊び」についての授業時間（内容）が15回（演習：模擬保育5回を含む）から1回（講義）へと大幅に減少するということが明らかになった。

### ③「運動遊び」に関する課題への対応

新カリキュラムへの移行に際しての「運動遊び」に関する課題として、学生の現状からは「運動遊びを経験する時間の確保」と科目の変更（単位数、時間数を含む）に伴う「運動遊びについての授業時間（内容）が大幅に減少する」ことに対する対応の必要性が明らかになった。

図2は「運動遊び」の経験及び授業時間数確保を意図した新カリキュラム対応表を示したものである。新たに「運動遊び」を授業内容とした「こどもと運動」を実技科目としての「体育」（本学では「スポーツ実技」：1単位15コマ）として実施することにより、「運動遊びを体験する時間の確保」及び「運動遊びについての授業時間（内容）減少の解消」という課題に対応したものとなった。


(旧カリキュラム)		(新カリキュラム)	
「保育内容(健康)」演習 2単位(15コマ)		「保育内容(健康)」演習 2単位(15コマ)	「こどもと健康」講義 1単位(8コマ)
		「こどもと運動」実技 1単位(15コマ)	

図2 「運動遊び」の時間数確保を意図した  
新カリキュラム対応表

## (2) 基本的動作について

### ①基本的動作の内容について

文部科学省は、幼児期の運動の在り方について「幼児期運動指針」を策定し、幼児期における運動の意義として「幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分に行うことは、多様な動きを身に付けるだけでなく、・・・(中略)・・・、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる」<sup>6</sup>、また、幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培うことを目指して、「多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること」<sup>7</sup>を指針のポイントの一つとして挙げている。また、石河ら<sup>8</sup>は「1つの運動あそびで全ての運動動作はできないため、多様な運動の経験を通した動作の獲得が必要となる」と示している。このように幼児期における多様な運動遊びの経験を通した多様な動きの獲得の必要性を挙げている。

実際、体を動かす「運動遊び」では、多様な動き

を経験することができる。例えば、「鬼遊び」を楽しむ行うことで、種類やルールの設定の仕方によって出現する動きは異なることを前提にしても、「歩く、走る、とまる、よける、はねる、つかむ、立つ・座る(低鬼)、のぼる・おりる(高鬼)、ふむ(影ふみ)、とんでわたる(線鬼)」などの多様な動きを経験し、それらを獲得することにつながる。

一方で、小学校においては、子どもたちの体力低下や積極的に運動をする子どもとそうでない子どもの二極化が指摘され、平成20年度の学習指導要領改訂では、改定前は小学校高学年から位置付けられていた「体づくり運動」が小学校低学年から位置付けられ、「体づくり運動」の内容として「多様な動きをつくる運動(遊び)」が小学校低学年及び中学年で示された。これらの動向から、幼児期における二極化に伴う身体活動経験の個人差が広がり、様々な体の基本となる動きを経験できていない、身に付けていない子どもが増加傾向にあることがわかる。

そこで、幼児期に経験したい、身に付けたい動作とは具体的にはどのようなものであるのかについて注目したところ、「多様な動き」や「動作」の獲得など、異なる表現が用いられており、この(運動)動作とは、宮丸<sup>9</sup>による「基本的動作(fundamental movement)」に該当するものであり、ヒトが獲得しうる多種多様な運動の基本形態といえる。さらに、この「基本的動作」について、体育科学センター<sup>10</sup>は「基本的動作とその分類」として84種121の動作を示し、文部科学省の「幼児期運動指針」<sup>11</sup>では「幼児期に経験する基本的な動きの例」として28種の動作、保育者養成校で使用しているテキストでは、杉原<sup>12</sup>による「幼児期に習得される基礎的運動パターン」として35種72の動作、中村<sup>13</sup>による子どもの運動場面に限定した基本的な動きとして取り上げられた「36の基本的な動き」では36種の動き、「幼少期に身につけたい36の基本動作」<sup>14</sup>では、中村と同じ36種の動きを含め112の動作を示していた。このように、どの資料も、言い換えれば就学前に経験あるいは身に付けておきたい動作(動き)を示しているものであると言えるが、動作(動き)の種類や数の提示方法が異なるものであった。

### ②基本的動作の種類について

前述した5つの資料に出現した動作数を抽出した結果、総数369(同じ資料で同じ動作が複数記載されている場合、総数に含む。また、漢字表記とひらが

な表記など、表記方法が異なる場合も動作名が同じである場合は同一動作名とした)であった。

また、表記方法が同一である動作名を抽出した結果は153種類であった。表1は、5つの資料における動作名を出現数別に示したものである。

全ての資料において、同一動作名として示されていたのは16種類(おす、ける、こぐ、すべる、つむ、とぶ、なげる、のぼる、はう、はこぶ、はしる、ひく、ぶらさがる、ほる、まわる、もつ)であり、4つの資料で示されていたのは21種類、3つの資料で示されていたのは22種類、2つの資料で示されていたのは41種類、1つの資料のみで示されていたのは53種類であった。なお、下線で示された動作(あてる、おりる、たおす、とまる)については、同資料で複数提示された動作を示しているが、資料出現数としては「1」とした。

表1 動作名の出現数(資料<sup>8~12</sup>参照)

出現数	種類	動作名
5	16	おす、ける、こぐ、すべる、つむ、とぶ、なげる、のぼる、はう、はこぶ、はしる、ひく、ぶらさがる、ほる、まわる、もつ
4	21 (3)	あてる、あるく、うつ、おきる、おさえる、およぐ、 <u>おりる</u> 、くぐる、くむ、ころがす、ころがる、さかだちする、ささえる、 <u>たおす</u> 、たつ、つかむ、とる、ねころぶ、のる、ふる、わたる
3	22	うく、うける、おいかける、おきあがる、おしたおす、おろす、かつぐ、スキップする、たたく、たちあがる、とびこす、とびつく、にげる、はいりこむ、はねる、ひっぱる、ぶつかる、ふりまわす、まわす、もぐる、もちあげる、わたす
2	41 (1)	あげる、あたる、うけとめる、うごかす、うちあげる、うちとばす、おこす、おさえつける、おぶさる、かがむ、かける、ギャロップする、くぐりぬける、くずす、けりとばす、しぼる、しゃがむ、すべりおりる、すわる、ツーステップする、つかまえる、つきおとす、つく、つみあげる、とびあがる、とびおりる、とびのる、 <u>とまる</u> 、とめる、なげあてる、ねる、のりまわす、はいのぼる、はいる、ひっぱりおこす、ぶつかる、ふむ、ホップする、もたれかかる、もたれる、よじのぼる
1	53	あおむけにうく、あがる、あるいてわたる、あるきわたる、いれる、うかべる、うつぶせにうく、おう、おう(負う)、おく、おしだす、おしだす、おとす、おぶう、おんぶする、かいてんする、かかえておろす、かくれる、かけこする、かわす、けずる、けりあげる、さかさまになる、しばりつける、すもうをとる、だく、つつく、つまかさなる、つまかさねる、でんぐりかえしをする、とびはねる、とんでわたる、なげあげる、なげいれる、なげおとす、にぎる、にげまわる、のせる、はこびいれる、はしってわたる、はずませる、バランスをとる、引きずる、ふみつける、ふりおとす、まく、まっすぐうく、まるくなってうく、みをかかわす、もちかえる、よける、わる、ワルツする

\* 下線は、1つの資料に複数記載された動作を示す。( )内の数字はその数。

前述した「幼児期運動指針」で「幼児期に経験する基本的な動きの例」<sup>15</sup>として紹介されている28種の動作について、他の資料では同一動作名で示されていない動作としては、12種類(あるく、おきる、おりる、ころがす、ころがる、すわる、たつ、とる、ねころぶ、はねる、よける、わたる：下線は複数の

資料に示されていない動作であることを示す)あり、特に「よける」という動作名は他の資料では全く使用されていないことがわかった。表1で示したように、種類としては153種類の動作に分類されたが、表記方法が異なることにより、同一動作や類似動作が数多く含まれていることもわかった。

### ③基本的動作の分類について

上述したように、資料によって、数や種類、動作名が異なっているものもあったが、資料に示されている基本の動き(運動パターン)の種類や数は、動作(動き)の経験の有無や程度などの把握のために使用されることもあることから、前述した153種類の動作に含まれている類似動作の整理を含めた基本的動作の分類による資料の作成を試みた。

表2は「幼児期において経験しておきたい基本的動作」としてまとめたものである。

平衡系の動作(体のバランスをとる動き)12種類、移動系の動作(体を移動する動き)12種類、操作系の動作(用具を操作する動き・力試しの動き)27種類、合計51種類に分類した。

特徴的な分類の観点を以下に示す。

\* 資料により、同一運動パターン(基本的動作、基本動作)

として示されている動作の組み合わせが異なるものについては、動作の組み合わせ例を参考にさらに分類した。

(例1)

基本動作として「のぼる」に「とびのる」が分類されていたものと、基本的動作として「とびのる・あがる」が同一動作として分類されていたものがあったことから、「のぼる」に「あがる」を分類した。

(例2)

基本動作として「のぼる」に「とびおりる・すべりおりる」が分類されていたものがあったが、移動系の動作としての上下運動として「おりる」に分類した。また、「おりる」は「上下運動」と「脱荷重動作」として別途分類されていたものがあったが、動作名「おりる」として統一した。

(例3)

「跳びはねる、スキップする」を「跳ぶ、跳びこす、跳びつく」と同一運動パターンとして分類されていたものがあったが、基本動作として「はねる・スキップする・ホップする・ギャロップする・2ステップする」が同一動作として分類されていたものがあったことから、上記動作を「はねる」に分類した。また、「2ステップ・ワルツする」、(移動系の動作、水平動作)が同一動作として分類されていたものがあったことから、「はねる」に「ワルツする」を分類した。

表2 幼児期において経験しておきたい基本的動作（資料<sup>8~12</sup>をもとに筆者作成）

カテゴリー	総数	項目数	動作名	関連動作
（体のバランスをとる動き） 平衡系の動作	1	1	うく	まっすぐうく、まるくなつてうく、あおむけにうく、うつぶせにうく、うかべる
	2	2	起きる	おきあがる
	3	3	くむ	つみかさねる、つみかさなる、抱く
	4	4	転がる	
	5	5	さかだちする	さかさまになる
	6	6	座る	かがむ、しゃがむ
	7	7	立つ	たちあがる
	8	8	寝ころぶ	ねる
	9	9	バランスをとる	
	10	10	ぶらさがる	
	11	11	回る	回転する、でんぐり返しをする
	12	12	わたる	あるきわたる、あるいてわたる、とんでわたる、はしってわたる
（体を移動する動き） 移動系の動作	13	1	歩く	ふむ、ふみつける
	14	2	およぐ	もぐる
	15	3	下りる	とびおりる、すべりおりる
	16	4	くぐる	くぐりぬける、はいる、はいりこむ
	17	5	すべる	すべりおりる
	18	6	跳ぶ	とびつく、とびあがる、とびこす
	19	7	とまる	ふむ一、にげる一
	20	8	登る	はいのぼる、よじのぼる、とびのる、あがる
	21	9	這(は)う	
	22	10	走る	かける、かけっこする、おう、おいかける、にげる、にげまわる
	23	11	はねる	とびはねる、スキップする、ホップする、ギャロップする、ツーステップする、ワルツする
	24	12	よける	かわす、身をかわす、かくれる
（用具を操作する動き・力試しの動き） 操作系の動作	25	1	あてる	ぶつける、なげあてる、あたる、ぶつかる
	26	2	いれる	なげいれる
	27	3	うつ	たたく、つく、つつく、はずませる、うちあげる、うちとばす
	28	4	おさえる	おさえつける、もたれる、もたれかかる
	29	5	押す	おしだす、おしだ(さ)す、すもうをとる
	30	6	おとす	なげおとす、ふりおとす、つきおとす
	31	7	おぶう	おんぶする、おぶさる、おう(負う)
	32	8	おろす(脱荷重)	かかえておろす
	33	9	くずす	
	34	10	蹴る	けりとばす、けりあげる
	35	11	こぐ	のる、のりまわす
	36	12	転がす	
	37	13	ささえる	
	38	14	しばる	しばりつける、まく
	39	15	たおす	
	40	16	つかむ	つかまえる、にぎる
	41	17	積む	積みあげる、のせる、おく
	42	18	捕る	とめる、うける、うけとめる
	43	19	投げる	なげあげる
	44	20	運ぶ	はこびいれる、うごかす
	45	21	引く	ひきずる、引っ張る、おこす、ひっぱりおこす
	46	22	ふる	ふりまわす
	47	23	掘る	けずる
	48	24	まわす	
	49	25	持つ	かつぐ、もちあげる、もちかえる、あげる
	50	26	わたす	
	51	27	わる	

## (例4)

「くぐる・くぐりぬける」と「はいる・はいりこむ」として、移動系の動作の同じ回転動作でも異なる基本的動作として分類されていたものがあったが、運動パターンとして「くぐる、入り込む」、基本動作として「くぐる・くぐりぬける・はいる・はいりこむ」が同一動作として分類されていたものがあったことから、上記動作を「くぐる」に分類した。

## (例5)

運動パターンとして「持つ、つかむ、にぎる」と分類されていたものがあったが、基本的動作として「つかむ・つかまえる（操作系の動作、捕捉動作）」、基本動作として「つかむ・つかまえる」と「もつ・かつぐ・あげる・もちあげる—おろす」に別途分類されていたものがあったことから、「もつ」と「つかむ」に分けて分類した。

## (例6)

「はこぶ」と「うごかす」として、操作系の動作の同じ荷重動作でも異なる基本的動作として分類されていたものがあったが、基本動作として「はこぶ・うごかす」が同一動作として分類されていたものがあったことから、「はこぶ」に「うごかす」を分類した。

## (例7)

「こぐ」の分類については、参考にしたすべての資料で動作として分類されていたが、「幼児期運動指針」では「のる」「のりまわす」の分類はなかった。基本的動作としての「こぐ」（操作系の動作、荷重動作）と「のる」（平衡系の動作、姿勢変化）、「のりまわす」（平衡系動作、姿勢変化）をそれぞれ分けて分類しているものがあり、基本動作として「のる」（平衡系動作）に「のりまわす」を分類し、「こぐ」（操作系動作）と別途分類していたものもあったが、「こぐ」も「のる」も例として「自転車」が挙げられており、「乗る、こぐ」を同一運動パターンとして分類していたものがあったことから、「こぐ」に「のる」を分類した。

## (例8)

「投げる、当てる、落とす」を同一運動パターンとして分類されていたものがあったが、基本動作として「なげる」（なげあてる・あてる・ぶつける）と「あてる」（あたる・ぶつける・ぶつかる）と分類しているもの、基本的動作として「なげる・なげあげる」（操作系動作、攻撃的動作）、「あてる・なげあてる・ぶつける」（操作系動作、捕捉動作）と分類しているものがあったことから「あてる」と「なげる」を分けて分類した。また、基本的動作として「つきおとす」、「なげおとす」（操作系の動作、可住動作）、「ふりおとす」（操作系動作、攻撃的動作）、基本動作として「おす」（操作系動作）に「つきおとす」が分類されているものもあったが、「つきおとす」、

「なげおとす」、「ふりおとす」については「おとす」に別途分類した。

## (例9)

基本動作として「おんぶする」は「くむ」に分類されていたが、基本的動作として「おぶう・おぶさる」（操作系の動作、荷重動作）と「つみかさねる・くむ」（平衡系動作、姿勢変化）は別途分類されており、運動パターンとしても「負う、おぶさる」と「組む、抱く」は別途分類されていたことから「おんぶする」は「おぶう」に分類し、「くむ」とは分けて分類した。

## (例10)

「幼児期運動指針」の動作としても分類されている「とる」については、すべての資料で「とる」として動作が分類されているわけではなかった。基本的動作として「うける」「うけとめる」「とめる」（操作系の動作、捕捉動作）として別途分類されていたが、「とる」という動作の分類はなく、基本動作として「とる・とめる・うける・うけとめる」（操作系動作）、運動パターンとして「捕る（キャッチする）、受ける」として分類されているものがあったことから、上記動作を「とる」に分類した。

## (例11)

「うつ・うちあげる・うちとばす」と「たたく」は操作系の動作の同じ攻撃的動作でも異なる基本動作として分類されていたものもあったが、基本動作として「うつ」（うちあげる・うちとばす・たたく）と分類されていたものもあったことから「うつ」に「たたく」を分類した。また、運動パターンとして「（ボールなどを）つく、はずませる」と「うつ、たたく、つつく」は別途分類されていたが、語句の意味としては、例えば「ボールをつく」とは「打ち当ててはずませる。」ことを示し、関連語として「突つく（つつく）」が示されており、運動パターンとして「打つ、たたく、つつく」と分類されていたことから、上記動作を「うつ」に分類した。

## (例12)

基本動作として「くずす」は「つむ」（つみあげる—くずす）に同一動作として分類されていたものもあったが、基本的動作として「つむ・つみあげる」（操作系動作、捕捉動作）と「くずす」（操作系動作、攻撃的動作）と別途分類され、運動パターンとして「積む、のせる、置く」は分類されているが「くずす」は含まれていないことから、「くずす」と「つむ」は分けて分類した。

## (例13)

基本的動作として「すもうをとる」が分類されていたが、例えば「鬼ごっこをする」などと同様に動作としてよりも複合的な動作が出現する可能性のある「運動あそび」ではない

かと考えた。その上で、対象とした「幼児期」における「すもうをとる」では「手押しすもう」に代表される動作が想定されるとし、「おす」に分類した。

### 3) 指導実践（模擬保育）について

保育内容の指導法では、保育内容の指導法と保育の構想の到達目標<sup>16</sup>として「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」が含まれている。模擬保育を実施することが前提であるが、模擬保育の内容と方法については、保育者養成校で様々な取り組みが行われ、指導法の担当者の専門性から、指導実践（模擬保育）のテーマの設定も多様であると考えられる。

そこで、指導実践（模擬保育）の現状と今後の課題について検討する。

#### (1) 授業実践（模擬保育）の現状と課題

##### ①テーマ

移行期間中の「教科に関する科目」としての「体育」においては、「運動遊び」に関する指導実践（模擬保育）を実施し、2021年度の「保育内容（健康）」においては、食育と健康をテーマに、「手作りおもちゃ（玩具）での遊び」について指導計画の立案、修正、発表、振り返りを行った。

本学では、その他にも様々な科目で授業実践（模擬保育）は行われており、「幼稚園教育実習Ⅰ（事前事後指導を含む）」（3～4年：1単位）や「保育実習指導Ⅰ」（2～3年：2単位）などの授業は長期間にわたり、かなり多くの時間をかけて模擬保育が実施されている。その中でも「運動遊び」をテーマとして選択している学生は見られるものの、場所として講義室を2つに分けて使用し、同時に2つの実践を展開する方法で模擬保育を実施している状況であることもあり、移動を伴うような「運動遊び」の模擬保育は「体育」の授業以外ではほとんど行われていない。

新カリキュラムでは、「教科に関する科目」としての「体育」（演習）が「領域に関する専門的事項」に関する科目「こどもと健康」（講義）に変更になることは前述したが、「体育」において、15コマで展開していた「運動遊び」への取り組みが、講義科目としての「何を」にあたる内容へと変更になるために、5コマ分（準備、振り返りも含む）で展開していた「運動遊び」の指導実践（模擬保育）をどうするか

を検討する必要性が生じた。

旧カリキュラムでは、「体育」で「運動遊び」の指導実践（模擬保育）を実施していたこともあり、「保育内容（健康）」で「運動遊び」の指導実践（模擬保育）を実践する必要がなかった。しかし、新カリキュラムへの移行に伴い、単純に「保育内容（健康）」における授業実践（模擬保育）のテーマを「運動遊び」へ変更することには課題が考えられた。変更後には授業において「運動遊び」をほとんど経験する時間が確保できない状態で、指導実践（模擬保育）のテーマとして実施することは、学生にとって実践のハードルが高くなると考えられるからである。

ただ、すでに課題に対する対応策として図2で示したように、「運動遊び」を授業内容とした「こどもと運動」を実技科目としての「体育」（本学では「スポーツ実技」という。）として実施することで、課題であった「運動遊び」の時間の確保が可能となり、「保育内容（健康）」での指導実践（模擬保育）の実施を可能にした。

##### ②参考文献

2020年度の「運動遊び」の模擬保育の計画にあたり、学生が参考にした「参考文献」の調査を行った結果を示したものが表3である。

表3 参考文献

	文献(資料)のみ	文献及びサイト	サイトのみ
数	9	4	16

対象者29名のうち、計画作成のために参考にしたものとして最も多かったのがサイト（YouTube）のみを参考にした学生で16名、文献（資料）のみを参考にした学生9名、両方を参考にした学生が4名であった。文献（資料）を参考にした学生は13名で、そのうち、授業内で内容を紹介した、大学図書館にある「運動遊びカリキュラム通信」を参考にした学生は7名であった。

サイトでの動画を参考にした理由としては、実践している様子や遊びの様子を視聴することで、「展開をイメージしやすい」（ので計画をする際に参考にした）というものが多数であった。前述したが、経験したことのある運動遊びであっても、「説明することはできない」、「ルールがよくわかっていない」、「展開の仕方を忘れてしまっている」という状況である学生が多いことから、文字情報よりも視覚的情報を

参考にする学生が多かったのではないかと考えられる。

しかしこれまでの経験から、例えば、小学校体育で扱う内容としての「フォークダンス」では、基本的なステップや動きを身に付けることなども示されているが、サイト（YouTube）での実践を参考に事前学習をしてきた学生は、進行方向やステップなど、特に方向（前後左右）に関する誤情報により正しい動きを提示できないことがこれまでも多く見られた。

これらのことから、少なくとも授業の計画の際にサイト（YouTube）を参考にする学生が約70%いた本学の学生に対しては、情報の精査や再確認の必要性について伝えていく必要があるということが改めてわかった。

## (2) 人数について

特に、本学では「少人数教育」を大学の特色として掲げていることもあり、定員40名（保育者養成校としてスタートした2007年～2010年）の際も、定員30名（2011年～現在）の際も、ともに2グループ（クラス）制をとっており、「教科に関する科目」としての「体育」の授業はグループ（クラス）毎に行い、定員30名の現在は、15名ずつでの授業を実施することができていた。

新カリキュラムでの課題は、授業時の人数である。これまでの「保育内容（健康）」は演習科目ではあったものの、2グループの合同授業での実施であり、新カリキュラムでも合同で授業を実施する予定となっている。これまでは1人で指導実践（模擬保育）を行ってきたが、新カリキュラムでは複数名でのグループによる実践に変更することになる。このこと自体が課題になるのではないかと考えられたが、中川は「模擬保育を1人で行う場合より、グループを組み指導案作成・実践を行う過程で、他者意見を聞き話し合いを進めることで指導案の内容や実践を深めることができていた。特に指導案作成や運動遊びの実践に苦手意識がある場合には、一人で実践を考えた場合には内容が深まりにくい<sup>17)</sup>と指摘していることから、グループによる実践はむしろ苦手意識をもつ学生にとっては取り組みやすさに繋がるということが分かった。

## (3) 実践方法について

これまでの「運動遊び」の授業実践（模擬保育）

は「教科に関する科目」としての「体育」15コマの授業のうち5コマ分（準備、振り返りも含む）で展開していた。15名程度の少人数であったことから、実践の流れは下記のとおりであった。

○一人10分の実践。

○9分（1分前）で青旗、10分で黄旗、11分で赤旗を提示し、時間を意識しながら実践に取り組む。

○「運動あそび名」、「（実践者の）学籍番号、名前」、「対象年齢」、「ねらい」を明記したA3用紙を毎回壁に掲示し、内容等が確認できるように視覚化した。

○各実践に対し、「参加者（観察者）としての評価」と「保育者を目指す者としての評価」を、記名の上、責任をもって記載し、提出期限内に指定された場所に提出する。

○提出された「評価表」は原本を授業担当者が保管し、コピーを各実践者別にまとめ、希望者が受け取れるように準備する。（提出時には記載されていた「記入者名」は、配布物からは切り取っての配布）

○実践時の様子を振り返ることができるよう、ビデオ撮影を行い、希望する学生には本人の実践のビデオに限定したうえで、USBデータとして渡すことができることを周知している。

○最終的には、実践の振り返りとしての課題【実践のための計画（PLAN：指導案を含む）及び実践（DO）それぞれに対する自己評価、相互評価表による他の学生からの評価に対するまとめ、他の学生の実践に対する評価（あるいは他の学生から学んだことなど）】の提出を課しており、事前に学生にも周知したうえで、学年を超えた課題を参考にできるよう、提出物からの学びを可能としている。

かなりの時間を要する作業を伴うが、教育効果を考えて、新科目での実践においても、継続して実施していきたいと考える。

## (4) 実践からの学び・気づき

表4は、「指導実践（模擬保育）からの学び」として、自由記述により抽出した「キーワード」を項目別に整理したものである。対象者は32名であった。

運動遊びの計画においては30名の学生が「準備の重要性」を挙げ、「準備の大変さ」の指摘は2名であった。

「場の設定」や「隊形：子どもの集め方」など、狭い教室や座っての活動の指導実践とは違い、広い場所（体育館）で、実際に動いてみてはじめて気づく計画の不備や、臨機応変に計画（設定）を変更し



表4 指導実践（模擬保育）からの学び（複数回答可）

運動遊びの計画に関すること(事前準備含む)
<input type="radio"/> 準備の重要性(30) <input type="radio"/> 場の設定 ・範囲の設定(14)・範囲の明確化(8) <input type="radio"/> ねらい(19) <input type="radio"/> 運動遊びの選択(年齢に合った)(18) <input type="radio"/> 遊具(18) <input type="radio"/> 隊形:子どもの集め方(11) <input type="radio"/> 間隔・距離(8) <input type="radio"/> 立ち位置(7) <input type="radio"/> 準備の大変さ(2)
運動遊びの実践に関すること
<input type="radio"/> 言葉かけ、説明、指示 ・ルール理解に対する確認(22) ・言葉の選択(21)・ポイント(19)・的確な言葉かけ(9) ・全体や個人を意識した言葉かけ(8)・言葉遣い(7) <input type="radio"/> 遊びの展開意欲を促す工夫 ・時間配分(13)・見本の提示(13) <input type="radio"/> 意欲を促す工夫 ・子どもの発言への対応(15)・難易度(13) ・ルールの変更(12)・導入の工夫(10) ・できない(苦手な)子への対応(7)・練習(7) ・繰り返しの展開(6)・次の活動への移行(6) ・コミュニケーションをとる(5)・ほめる(5) ・注意の促し(4)・フェイント言葉の選択(4) ・質問やヒントを出す(2)・はげまし(2) ・応援の促し(2)・イメージを持たせる(2)・間をとる(2) <input type="radio"/> 声 ・大きさ(14)・聞き取りやすさ(14)・速さ(5)・トーン(3) <input type="radio"/> 安全性:施設、用具、遊び方、約束事など(13) <input type="radio"/> 保育者の姿(14):緊張・不安・雰囲気・余裕の有無
実践を通しての気づき
<input type="radio"/> 言葉のレパートリーの必要性(9) <input type="radio"/> 遊びのレパートリーの必要性(5) <input type="radio"/> 子ども目線で考えることの必要性(3) <input type="radio"/> 他の学生からの評価への満足(3)

ながら対応していくことができないことを準備に起因していると考えた学生もいたためと考えられる。

運動遊びの実践においては「言葉かけ、説明・指示」など、発する「言葉」の難しさへの気づきが最も多かった。大学生としての日常の「言葉」とは異なる対応の必要性への指摘が多かった。このことは、実践を通しての気づきにおいても「言葉のレパートリー」と「遊びのレパートリー」を増やしておくという今後の学びの広がりにつながる気づきとなっていた。

この結果は指導実践（模擬保育）をした学生たちへのフィードバックを行う際にも活用するが、今後取り組む予定の学生への資料としても活用していくこととした。

### 3 まとめ

本稿は、保育者養成校である本学における新教職課程のスタートにあたり、旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行に際しての筆者の担当する科目間の系統性を意識した授業内容を検討することを目的として取り組んだ。

課題として、担当する関連科目の変更に伴う、単位・授業時間数の減少（4単位30コマ→3単位23コマ）及び「運動遊び」の授業内容の減少（15コマ→1コマ）、指導実践（模擬保育）5コマの取り扱い条件と科目の検討をする必要性とともに、「運動遊び」を対象とした授業や指導実践（模擬保育）を通して見られる学生の現状からは「指導法」の学びに加え、「運動遊び」の経験やレパートリーの少なさを解消するための「運動遊び」を経験する時間の確保の必要性が明らかになった。

これらの課題を解消する手立てとして、新たに「運動遊び」を授業内容とした実技科目を系統的に位置づけることで、単位・授業時間数（4単位30コマ→5単位38コマ）、「運動遊び」の授業時間数【15コマ→21コマ:指導実践（模擬保育）5コマを含む】は、「運動遊びを体験する時間の確保」及び「運動遊びについての授業内容減少の解消」につながり、加えて課題であった「保育内容（健康）」での「運動遊び」の指導実践（模擬保育）の実施を可能にした。

また、幼児期に必要なとされる多様な運動遊びの経験を通した多様な動きの獲得を目的とするためにも、動作（動き）の種類や数の提示方法が異なることに着目し、資料による分類の傾向を参考に、幼児期において経験しておきたい51の基本的動作を整理した。

指導実践（模擬保育）については、今後の授業における指導上の留意点などが明らかになった。少なくとも授業の計画の際にサイト（YouTube）を参考にする学生が約70%いた本学の学生に対しては、情報の精査や再確認の必要性について伝えていく必要があるということ、こだわって実施してきた個人による計画及び実践が新カリキュラム移行に伴い実施できなくなることが確認されたが、グループによる実践はむしろ苦手意識をもつ学生にとっては取り組みやすさに繋がるということが分かったことで、スムーズな移行が可能となった。加えて、これまでも実践からの学びとして提出されたレポートは閲覧可能にしているので、計画や課題への取り組みで参

考にすることは可能であり、多くの学びが自分だけの学びにとどまらず、共有していくことができ、さらに学びの広がりにつながるよう有効活用していきたい。

## 引用・参考文献

- 1 文部科学省：幼稚園教育要領，  
([https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_3\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf)  
2021年9月1日閲覧)
- 2 文部科学省：新幼稚園教育要領のポイント  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryu/\\_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385\\_003.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryu/_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385_003.pdf) 2021年9月25日閲覧)
- 3 文部科学省「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」  
([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/1385790.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm) 2021年9月1日閲覧)
- 4 文部科学省「法令改正及び教職課程の認定の概要」  
([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/08/09/1415122\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/08/09/1415122_1_1.pdf) 2021年9月1日閲覧)
- 5 文部科学省「改正法令の経過措置について」  
([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1414559\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1414559_1.pdf)  
2021年9月10日閲覧)
- 6 文部科学省「幼児期運動指針」  
([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/undousisin/1319771.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm) 2021年9月1日閲覧)
- 7 同上
- 8 石河利寛，栗本関夫，勝部篤美ほか（1983）幼稚園における体育カリキュラム作成に関する研究Ⅳ—運動種目の選定とその検討，体育科学，11，131-143.
- 9 宮丸凱史（1984）運動保育の考え方，赤塚徳郎・調枝孝治編，明治図書，p.64.
- 10 体力科学センター調整力専門委員会体育カリキュラム作成委員会（1980）幼稚園における保育カリキュラムの作成に関する研究，Ⅰ．カリキュラムの基本的な考え方と予備調査の結果について，体育科学，8，150-155.
- 11 文部科学省「幼児期運動指針」，前掲書.
- 12 杉原隆・川邊貴子（編著）「幼児期における運動発達と運動遊びの指導—遊びのなかで子どもは育つ」ミネルヴァ書房，2014年，p.48.
- 13 中村和彦（2011）運動神経がよくなる本，マキノ出版
- 14 ミズノスポーツサービス「幼少期に身につけたい36の基本動作」  
(<https://www.mizuno.jp/facility/36basicaction/> 2021年9月1日閲覧)
- 15 文部科学省「幼児期運動指針」，前掲書.
- 16 文部科学省：教職課程コアカリキュラム  
([https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf) 2021年9月1日閲覧)
- 17 中川（2020）保育内容研究Ⅳ（健康）におけるコミュニケーションにおける模擬保育の検討 函館大谷短期大学研究紀要 34，32-40.